

# 2025年度

# 桃美会プロジェクト助成

# 報告書

- 1p ▲ ダム貯蔵酒イベント広報デザインプロジェクト
- 2p ▲ 八百津町/森と木の活用プロジェクト 2025
- 3p ▲ 高大連携、デジタルコンテンツ制作指導プロジェクト
- 4p ▲ 地域課題解決演習  
「マイクロデザインセンター」プロジェクト
- 5p ▲ 愛知アール・ブリュット デザインコンペプロジェクト
- 6p ▲ 屋外ギャラリー展示プロジェクト 2025
- 7p ▲ 和の伝統プロジェクト - 仏教美術保存修復 -
- 8p ▲ 伊勢型紙プロジェクト
- 9p ▲ 柳原通商店街中杉ビル「地域拠点スタートアップ計画」  
アワード+コンペ：応募プロジェクト
- 10p ▲ キッズシネマ プロジェクト
- 11p ▲ おかしなサマースクール in 愛知 2025

# プロジェクト名： ダム貯蔵酒イベント広報デザインプロジェクト

期 間： 2025年4月～10月

指 導 教 員： 東仲 雅明

参 加 者 数： 映像文学領域 15人 + 空間作法領域 1人

【ボトルトート】 コストを考慮したインクジェット印刷仕様のため、外注とした。

## プロジェクトの概要

### ダムを天然の貯蔵庫として使い熟成させた日本酒「ダム酒」イベントの広報ツールと販売グッズをデザイン制作。

愛知・岐阜の13酒蔵が、それぞれの地元にある4つのダム(矢作ダム・丸山ダム・阿木川ダム・小里川ダム)堤体内に日本酒を年単位で貯蔵し、その熟成年数による味の変化を楽しむという新たな提案を広報する目的で、名古屋市内の酒販店協力と名古屋国税局の後援を得て開催する試飲販売イベント『ダム酒フェス』が名古屋・栄で2023年より開催されている。本学は初年度から継続の広報ツール(フライヤー・ポスター)制作に加え、2024年度には「桃美会プロジェクト助成金」を使用した試作品によってイベント物販用グッズ3種(缶バッジ・ボトルトート・サコッシュ)を提案。うち缶バッジ3種が販売され、ボトルトート提案も高い評価を得た。この活動実績により 2025年度イベント予算に「ボトルトート」「缶バッジ」のグッズ制作費用が正式に組み込まれることとなり、制作依頼を引き受けた本学は産学連携プロジェクト授業を開講し取り組み、実行委員会メンバーによる選考で採用・商品化されたものが販売された。

### 活動の成果

#### 1. イベントグッズ [桃美会助成金により提案試作品を制作]

「ボトルトート」は16案提案から3案採用(各50枚/販売価格1,000円)「缶バッジ」は84案提案から14案採用(各10個/販売価格200円)、商品となった。これらグッズはイベントに不可欠なものという高評価を得ることとなり、今年度にはそれら2種に加え、新たなグッズ1種の提案が追加依頼されている。

#### 2. 広報フライヤー・ポスター

告知に使用するフライヤーとポスターにつき18案を提案。実行委員会メンバーによる同日選考により1点を採用。関連店舗での配布やSNS広報展開に加え会場での大型ポスター看板として実使用した。



【50点完売】 【20点販売】 【16点販売】  
商品化された3種。在庫は今年度イベントで継続販売予定

【缶バッジ】 商品化された14種。上段左上の3点の人气が高く完売となった。



## 参加者の声

- ・自分のデザインを主催者の方に選んでいただき、それをイベントに来たお客さんが手に取って購入してくださるというのは、なかなか貴重な経験でした。イベントを盛り上げるお手伝いできてとても嬉しい気持ちです。
- ・自分のアイデアが実際に形となり、イベントの中で多くの方の目に触れたことがとても新鮮で嬉しかったです。制作だけでなく「選ばれるデザイン」を意識するきっかけになり、今後に繋がる貴重な経験になりました。

## これまでとこれから

2024・2025年度の桃美会助成金を活用したグッズ制作提案によって、イベント実行委員会から本学学生の産学連携活動への期待と信頼、感謝を得ることができました。今年度も広報ツールとグッズの提案依頼を受け、産学連携プロジェクト授業は継続。現在11名が制作活動中です。

# プロジェクト名： 八百津町／森と木の活用プロジェクト 2025

期 間： 2025年9月～11月

指 導 教 員： 溝口 周子

参 加 者 数： 10人（空間作法領域）

## プロジェクトの概要

現在、日本の林業は衰退の一途を辿っており、林業従事者の減少や森の荒廃が、土砂災害や獣害の増加など、私たちの安全で豊かな生活にも影響を及ぼし始めています。そこで、日本の木材をより有効に活用する方法はないかを模索するため、2021年より学生と共に、岐阜県八百津町の「80%山のまちを元気にする協議会」のご協力のもと、木材製材所やヒノキの森の見学を継続して行っています。林業に携わる方々から直接お話を伺う機会は大変貴重であり、地域産業の現状や社会課題を自分事として捉えるきっかけとなり、学生の学びや意識の向上にもつながっています。今年は何岡崎製材さまの製材所において、日本の木の種類や特徴、加工の工程についてレクチャーを受け、実際にヒノキを育成する森を見学して林業の課題を学びました。さらに八百津町の町歩きを通して、林業で栄えた町の歴史や現在の過疎化対策についてもお聞きし、その取り組みの一環として、観光客へ配布する木のチャームのデザイン提案を行いました。



### まちの形と森の香り

まち歩きで感じられた自然の魅力を、「まち」と「森」のふたつの要素で表現しました。自然と人、まちの賑わいを繋げる木のチャームです。



かんなくずを利用したチャーム

「古道具で飾った八百津の町」  
木を削ると手に伝わる「かんなくず」を優しく、柔らかく削りました。手にするたびに森の香り、まちの賑わいを感じて、心がほぐれて、心が安らぎます。

香り、触れ、温、すべてが八百津の記憶を呼び起こす、自然の木のチャームです。



八百津の形をデザインしたチャーム  
「新しい森のものを育てよう」  
素材をレーザーカッターで木の形に切り出し、中央には「八百津」の町名を入れています。まちの賑わいや森の香りを感じながら、まちを歩くと、まちの記憶が蘇ります。

まちの賑わいや森の香りを感じながら、まちを歩くと、まちの記憶が蘇ります。

まちの賑わいや森の香りを感じながら、まちを歩くと、まちの記憶が蘇ります。

## 参加者の声

・皮のついた木の丸太を見たことがなかったので大きくてびっくりした。木といってもそれぞれ木肌の色が違い性質も違うことに驚いた。

・松の森はどこまでも続いて薄暗くて少し怖かったが、斜面で自分の身体より太い木が切り倒されて運ばれる様子を想像すると凄い仕事だと思った。

## 今後の展開

毎年、林業や農業など、社会課題に対する問題意識を持つためにもいずれかの見学会などを行っています。建築やデザインによる社会提案につながる取り組みを今後も続けていきたいと思っております。

# プロジェクト名： 高大連携、デジタルコンテンツ制作指導プロジェクト

期 間： 2025年5月～2026年3月

指 導 教 員： 外山 貴彦

参 加 者 数： 5名（情報表現領域）



## プロジェクトの概要

明和高校との高大連携としてデジタルコンテンツの制作指導を行いました。2026年度開館する明和高校音楽ホールの柿落としイベントの一つとして、音楽科の生徒による演奏に、映像によるインタラクティブプログラムによる演出を行うための前準備として、2025年度はデジタルコンテンツの制作体験と実装体験を行いました。

具体的には、明和高校の学園祭で四季をイメージしたインタラクティブコンテンツを外山スタジオの学生とともに開発し、それを展示しました。外山スタジオの学生がプログラムアプリケーションのアンリアルエンジンと3DCGソフトのブレNDERの操作方法などをレクチャー、それを基に高校生たちが作品を制作しました。

学園祭の発表後は2026年夏に実施予定の演奏会に向けて、楽器にマイクやセンサーを取り付け音から信号を取る実験や、演奏に合わせたプログラム、ビジュアル、などの案出しと実験的な制作を進めています。

2026年度も引き続き、外山スタジオの学生と明和高校の生徒で発表に向けた準備と制作に取り組んでいきます。



## 参加者の声

・自分が当たり前に見える操作が、知らない人にとっては、まったく未知な体験だという前提に立って、普段使っているアプリケーションやプログラムを、高校生に教えるのがとても難しかった。

・高校の先生とのメールのやり取りで段取りを決めるなど、連絡を通じてのマネージメントや、全てを高校生たちが作るのは時間的に難しいので、事前に基本のフォーマットを準備するなど、運用や制作のマネージメントを考えるのが重要だと感じた。

## 今後の展開

明和高校との高大連携は2026年度も引き続き行う予定で、概要でも記載したとおり、夏に予定されている明和高校音楽ホールで行う予定の演奏会に向けた準備を進めていきます。また、高大連携は他の高校との連携も視野にいれた活動も模索し、スタジオの学生たちと、高校生との共同制作や共同開発などを通じた交流を拡大していきたいと考えています。

プロジェクト名： **地域課題解決演習**  
**「マイクロデザインセンター」プロジェクト**

期 間： 2025年4月～2026年1月

指 導 教 員： 江津 匡士

副 代 表 者 等： 辻 琢磨

参 加 者 数： 19人（地域建築領域・情報表現領域・空間作法領域・映像文学領域）



## プロジェクトの概要

名古屋造形大学の西側に広がる名城公園では愛知県新体育館（IGアリーナ）が開業し、エリア全体のさらなる賑わい創出が期待されています。一方で大学東側の地域には、衰退傾向にある柳原通商店街が存在しています。こうした状況に対し、私たちは美術大学ならではのスキルと創造性を活かし、学生が主体的に関わることで地域の魅力を再発見し、価値を更新していくことを目指しています。その具体的な取り組みとして、柳原通商店街において2023年度より「マイクロデザインセンター」を運営しています。「マイクロデザイン」とは、店舗のメニュー表の改善や什器の制作、空間の見せ方の工夫など、日常に寄り添った小さなデザイン実践を指します。本プロジェクトでは、こうした活動を通じて学生が地域との対話を重ねながら関係性を築いていくことを重視しています。

学生たちはフィールドワークやリサーチを通じて地域の課題や可能性を発見し、自身の関心や専門性を活かしながら具体的な提案・制作へと展開します。その成果は実際に地域で活用されることを前提としており、実装までを含めた実践的な学びの場となっています。

本活動を通して、地域に対して何ができるのか主体的に関わるとはどういうことかを問い続け、小さくとも確かな変化を生み出していくことを目的としています。2025年度は19名の学生が参加し9店舗と連携した取り組みを実施しました。

## 参加者の声

- ・実際の地域や商店街と関わることで、デザインが社会と直接つながっている実感を得られた。
- ・自分の得意分野や役割を見つめ直すきっかけになった。
- ・継続的に関わることで、地域への愛着や当事者意識が生まれた。
- ・自分の提案や制作物が実際に使われる経験に手応えを感じた。

## 今後の展開

マイクロデザインセンターの活動は、商店街組合の協力のもと、これまでに25件の取り組みを行ってきました。本活動を広く発信するため、アーカイブ展を開催し、その意義をあらためて共有するとともに、今後の継続的な活動へとつなげていきたいと考えています。

プロジェクト名： **愛知アール・ブリュット デザインコンペプロジェクト**  
 期 間： 2025年4月～10月  
 指 導 教 員： 木村 登紀子  
 参 加 者 数： 13人（情報表現領域）

## プロジェクトの概要

愛知県 × 名古屋造形大学 連携事業の一環として、2025年度木村ゼミではアール・ブリュット展覧会のフライヤーデザインに挑戦しました。4月の基礎レクチャーにはじまり、5月には実際に障がい者の方の制作環境（アトリエ）を見学し、試行錯誤をしながら、イメージを形にしました。条件に合うように、何度もラフスケッチを重ねました。

7月にはコンペを実施し、審査員の前でコンセプトを発表しました。どの作品もそれぞれの良さがあり、審査は難航しましたが、最終的に選ばれたデザインが実際に印刷され、関係機関や各施設へと配布されました。また、9月には学生たちのデザイン案を名城公園駅のギャラリー“komorebi”と学内ギャラリー（ボックス06）でも展示しました。

デザイナーの卵である学生たちが、自分の好きなテーマではなく、クライアントワークとして取り組んだことで、実践的なプログラムとなりました。



## 参加者の声

- ・「アール・ブリュット」って何？というところから始まりました！
- ・見学の際に一心不乱に作品づくりに向き合うエネルギーに圧倒され、どの作品にも力強さが感じられました。
- ・絵の上手さや正確な構図ではなく、描きたい衝動や執着、反復、感覚そのものに魅力が感じられました。
- ・普段のイベントや展覧会と違いメインビジュアルが思い浮かばずフライヤー制作に苦戦しました。情報を整理しながらレイアウトに落とし込む難しさなど、多くの学びがありました。

## 担当教員のコメント

学生たちはアール・ブリュットについて学び、制作現場を訪問しました。そこで、作家や支援者の方々の創作への熱意に触れ、同じ表現者として大きな感銘を受けました。同じテーマでありながらも、ゼミ生13人それぞれの視点や表現には個性が表れ、どの作品からも見応えあるデザインの成果と確かな手応えが感じられました。

# プロジェクト名： 屋外ギャラリー展示プロジェクト 2025

期 間： 2025 年 11 月中旬 ～下旬

指 導 教 員： 佐藤 克久

副 代 表 者 等： 荒川 朋子（非常勤講師）、染谷亜里可（非常勤講師）

参 加 者 数： 26 人（美術表現領域）

## プロジェクトの概要

美術表現領域佐藤スタジオの洋画 2 年生が中心となっではじめたプロジェクトである。2025 年度で 4 回目の開催となる。毎年テーマ、コンセプトを更新していき将来的には名古屋造形大学の名物展示になるように育てていきたいプロジェクトである。屋外ギャラリーでの展示は、開放的な空間であるため、学外の方々にも気軽に入場して楽しんで鑑賞できるような機会をつくりたい。



## 参加者の声

・屋外ギャラリーということで、その広い場所で作品を輝かせるのがむずかしかった。今後は自分の思うように描くことも大切だと思うが、その場所での輝かせ方を学んで生かしていきたい。

・今回の展示では、作品の意図を言葉だけでなく空間構成や視線の流れで伝える重要性に気づいた。講評からはコンセプトの明確化と取捨選択の大切さを学んだ。今後は制作前の思考整理を徹底し、表現の精度を高めていきたい。

・元々展示の機会が少なかったので、今回展示にあたって、アトリエとギャラリーでは作品の雰囲気はかなり変化するなと感じました。その為、作品を飾る場所などを想定して制作することが重要だと感じました。また、展示会を行って、沢山の制作を行い、計画的に多くの作品を作っていけるといいなと感じました。

## 2026年度への継続

個々の制作に於いて、驚くほどの集中力を見せ、身体サイズの空間を作ることも100号サイズに向かうことも初めてでそれは簡単なことではありません。簡単にゴールを設定せず、線を引き、素材の可能性を試し、眺めて考え、自分に戻し、また自分の外に出す、そんな本来の制作のあり方で挑んでいました。

その結果真摯な展示会が出来上がったと思います。一つひとつに丁寧な時間の蓄積があり、鑑賞側もじっくり対面する価値がありました。

（染谷亜里可・美術表現領域非常勤講師）

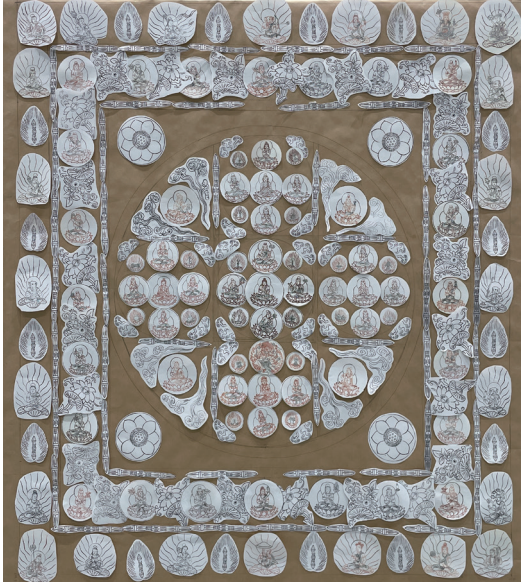
# プロジェクト名： 和の伝統プロジェクト - 仏教美術保存修復 -

期 間： 2018 年度から今現在

指 導 教 員： 濱田 樹里

副 代 表 者 等： 松浦 直子 梶野 靖代 齊藤 晴香 鈴木 靖代

参 加 者 数： 年間 約 80 人（美術表現領域・映像文学・視覚表現領域・地域社会圏・地域建築領域  
空間作法領域・情報表現領域・大学院）



## プロジェクトの概要

千年以上も受け継がれてきた絵画様式である日本画技法を用いて絵画技法や和の装飾美について表現技術を研究する。彩色技法基礎から応用までを日本画を描く事で学び、歴史的絵画の模写を通し、仏教美術における保存修復事業を行い、文化財について研究するプロジェクトである。

仏教美術への理解を深め、歴史的絵画を学生自身が熟覧調査し、保存修復について検討する。また古典技法を生かした作品制作へ展開していき、様々な表現への可能性を探求するプロジェクトでもある。日本画研究としてアジアの絵画表現の在り方を探求し社会と関わりを考えていく。纏網彩色から始まり、本学園の浄土真宗に伝わる【親鸞上人伝絵】の現状模写を行い、さらに【国宝・神護寺高雄曼荼羅】の復元模写にも取り組み始めた保存修復研究するプロジェクトである。



## 参加者の声

高雄曼荼羅を制作する中で、曼荼羅のどの部分に金泥や銀泥を施すかを資料から見つけたり推測したりする作業は非常に骨が折れたが、これまで全く知らなかった世界に触れることができ、大変勉強になった。

また、染色についても未経験だったため新たな学びとして有意義な時間となった一方で、染色液に布を多く入れるとまだらに染まってしまう点には苦労した。

さらに、金泥や銀泥を使うために必要な焼き付けなどの工程についても多くの新しい知識を得ることができたが、実際には布へうまく定着させるのが難しく、想像していた様な綺麗な表現をすること自体容易ではなかった。また、細かい部分の多い曼荼羅では面相筆を使っても絵の具が乗りにくいので線が太くなってしまいう点に特に難しさを感じた。筆に水を含ませすぎると布に水が吸収されるため線が太くなり、逆に水が少なすぎると滑らかな描画が困難なため、バランス良く進めていくのにかなり時間を要した。そのため、落ち着いて時間をかけて制作することが大切だと感じる事ができた。

## 今後の展開

今年度から【国宝・神護寺高雄曼荼羅】5～10年計画で始める。絹の染から色合いを研究し、厳選された金泥で描く線描の美しさに時空を超えた時代を感じつつ古典について研究する。また本学の浄土真宗に伝わる聖徳太子像の現状模写も継続して行う。

# プロジェクト名：伊勢型紙プロジェクト

期 間： 2025年9月～11月

指 導 教 員： 足立 ゆうじ

参 加 者 数： 25名（情報表現領域・視覚表現領域）

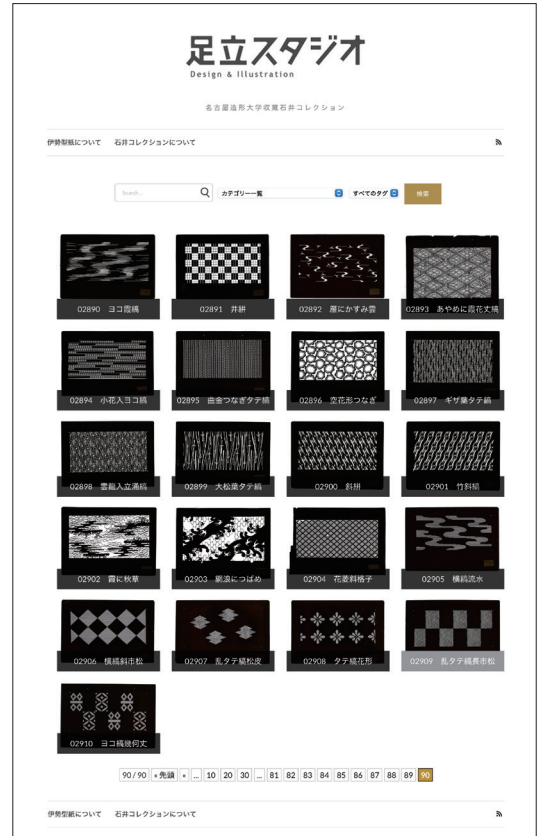
## プロジェクトの概要

名古屋造形大学に所蔵されている石井コレクションは、明治24年（1891年）に創業した石井染工所が所有し、貴重な資料として同窓会から大学に寄贈されたものです。石井染工所は合資会社松坂屋という呉服店（現・大丸松坂屋百貨店）の名古屋の染め物の、ほとんどを手掛けました。生み出された型紙は1920年から40年のキモノファッションの全盛期を支え、大正モダニズムから戦前・戦後を通じ名古屋における染物業界の地位を築きました。

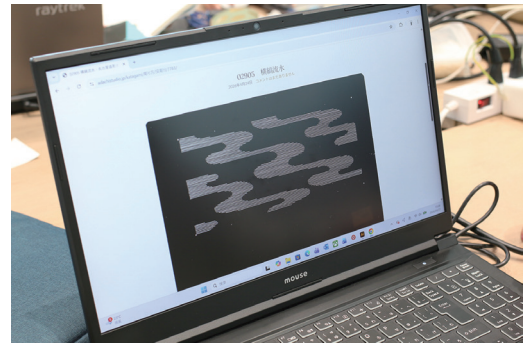
その型紙が地下倉庫に保管されており、なかなか閲覧されない状況を改善すべく記録撮影とWEBサイトに情報公開ができないかと考え、学生と共にプロジェクトを立ち上げました。

授業外の時間を使っでの活動のため、進みは大変遅いながらも少しずつではありますが公開に至っております。現在通し番号で2910番までの公開が完了しております。

このプロジェクトから発展して、2026年夏にメインギャラリーにて伊勢型紙を参考に、新しい型紙のデザインと販売するための商品計画を行っています。



2025年12月 三重県鈴鹿市（伊勢型紙資料館・鈴鹿市伝統産業会館）を訪問



## 参加者の声

- ・型紙のデザインが豊富で、昔の職人の方々の技術の高さにふれて驚きました。
- ・型紙に触れる前は、昔ながらの古いものというイメージだったけど異国のモチーフとかアジアっぽい柄もあり、それがとても意外でした。
- ・伝統文化にふれてみて、新しいデザインとして現代に蘇らせたらとても良いなと思いました。その思いが次のプロジェクトに繋がってよかったです。

## 今後の展開

2026年夏に伊勢型紙をモチーフに学生の若い感性で現代に甦らせるプロジェクトを行います。地元商店街や名古屋ゆかりの商品を販売するための新しいパッケージデザインの柄として現在制作中です。またその会期中に、このプロジェクトで公開しているWEBSITEも展示する予定です。

# プロジェクト名： 柳原通商店街中杉ビル「地域拠点スタートアップ計画」 アワード+コンペ：応募プロジェクト

期 間： 2025年6月～10月

指 導 教 員： 蜂屋 景二、江津 匡士

参 加 者 数： 10人(地域建築領域・情報表現領域)

## プロジェクトの概要

柳原通商店街の空き事務所を拠点に、地域活動拠点スタートアップ計画が始動しました。このプロジェクトは、柳原出身の合同会社大正の安藤さんや柳原通商店街振興組合の方々をはじめ、地域の皆さんのご協力のもと、地域活動の次世代への継承と学生による地域貢献を目的として進められました。蜂屋スタジオが地域拠点にふさわしい内装設計とデザインを提案、江津スタジオが拠点の使い方のワークショップを企画し、地域の方々と共に意見交換を行ってきました。これらの取り組みについて、竣工写真を建築カメラマンに依頼し、私たちで撮影した活動の様子と合わせて「JID AWARD 2025」、「愛知建築士会学生コンペ 2025」に応募しました。「JID AWARD 2025」はプロのデザイナーを対象としたもので、残念ながら入賞できませんでしたが、「愛知建築士会学生コンペ 2025」では一次審査を通過して、二次審査において「まちづくり部門・優秀賞」を受賞しました。



## 参加者の声

- ・ワークショップや意見交換を重ねる中で地域の方々との会話が自然と生まれ、関係性が深まっていくのを実感した。
- ・地域の方と一緒に考え、試行錯誤を重ねる中で、自分が地域に関わる意味や、クリエイターとして果たすべき役割が少しずつ見えてきたように感じた。
- ・「愛知建築士会学生コンペ 2025」では地域での実践的な取り組みが評価され、大きな励みとなりました。

## 担当教員のコメント

「愛知建築士会学生コンペ 2025」では応募や発表のプロセスを通して、自身の活動を言語化し、他者に伝えるための視点や方法を見直す機会となった。また、他大学の活動を知ることによって刺激を受けるとともに、新たなつながりも生まれ、今後の取り組みを考える際の視点が広がった。

# プロジェクト名：キッズシネマプロジェクト

期 間： 2025年4月～8月

指 導 教 員： 高橋 綾子

参 加 者 数： 15人（映像文学領域・地域建築領域・空間作法領域・情報表現領域）

## プロジェクトの概要

「キッズシネマ」とは、子どもたちが映画を通して豊かな創造体験を得ること、そして劇場での鑑賞体験を共有することから生まれる対話を意図したプログラムです。授業では、この「キッズシネマ」の実践を推奨する、映画配給会社のラビットハウスの全面的な協力によって、カナダのアニメーション映画『ドゥーニャとアレppoのお姫様』を題材にすることができました。映画では、内戦によって祖国シリアのアレppoを追われて難民となってしまった6歳の少女ドゥーニャの旅路が、アニメーションの特性を生かしたファンタジーとして、愛らしくも優しい眼差しで描かれています。学生たちは、この物語と創造の魅力を受け止めながら、ここで描かれている中東の文化や暮らし、シリアの内戦、国境や難民問題などを知ることから、それらを展示として伝える方法を考えました。展示会のタイトルは、「遠い国のこと」とされがちな中東や内戦の問題を、同じ「空」で繋がった自分たちの未来へと思いを馳せて、名付けたものです。この展示会に関連して、ワークショップ、上映会と対話鑑賞会、さらに今もなお困難にさらされた現地の様子を知るために、戦場カメラマンの渡部陽一氏を招いての講演会も実施することができました。



## 参加者の声

- ・人ごととは思っていなかったアレppoの現状ですが、「心配ごと」から「何とかしなくてはいけない事」に思いは変化しました。
- ・今、この時にも、この国のどこかで苦しんでいる子どもたちが居る事を心に留めて、日々を歩んでいきたいと思います。
- ・私たちと同じように祖父母がいて、家族、友人、兄弟姉妹がいて、家や文化があるという、平和な日々が貴重だと思い知らされた。

## 来場者の声

- ・アフガニスタンの14歳の少女が書いた『勉強日記』。ただ勉強がしたいというだけで、銃で弾圧されてしまう理不尽さと不条理さに胸が痛みました。
- ・今日ここで知ることが出来たことを重く受け止め、今後、世界にもっと目を向けて、現実を知り、少しでも世界が良い方向に向かうように支援などをしたいと思いました。

プロジェクト名： **おかしなサマースクール in 愛知 2025**  
 期 間： 2025年4月～2026年3月（イベントは2025年7月～8月）  
 指 導 教 員： 江津 匡士  
 副 代 表 者 等： 小粥 幸臣  
 参 加 者 数： 12人（美術表現領域・情報表現領域）



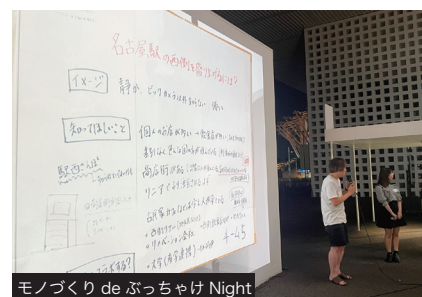
集まれ！もったいないギッズクリエイター



おやつで遊ぼ。



うち博士になっちゃおう！



モノづくり de ぶっちゃけ Night

## プロジェクトの概要

「つぶグミ」や「グリーン豆」でおなじみのお菓子メーカー・春日井製菓株式会社が主催する「おかしなサマースクール2025」に、名古屋造形大学は教育機関としては初めて、通年の取り組みとして参画しました。「おかしなサマースクール2025」は、愛知県内外の企業と連携して開催される学びと体験のイベントです。この企画に参加することで、大学が参加企業と繋がる機会であり様々な企業と学生がコミュニケーションをとりながら協力し、キャリアへの幅を広げる可能性を持ったプロジェクトでした。

学生は大学外の会場も含め6イベントの当日運営やサポートに参加し企業と一緒にイベントを盛り上げました。

6イベントの参加企業(29社)：(株)バッファロー、(株)スマック、マル伊商店(株)、(株)ウィルビジョン、(株)アクロネット、クリスピー・クリーム・ドーナツ・ジャパン(株)、(株)アイジーコンサルティング、シンニチ工業(株)、コクヨマーケティング(株)、勝川エリア・アセットマネジメント(株)、(合)ライラ・カンパニー、コーミ(株)、三栄商事(株)、名古屋眼鏡(株)、(株)シアン、CASHIME、ナカモ(株)、マドラス(株)、医療法人愛知会家田病院、春日井製菓(株)、大阪シーリング印刷(株)、Danchitects、健美薬湯(株)、(株)FabCafe Nagoya、東山遊園(株)、認定NPO法人子育て支援のNPO まめっこ、(株)ユニソン、(株)木村鋳造所、(株)de la hataraku、三菱地所(株)

## 参加者の声

- ・大学内で様々な企業と関わること知って参加しました。たくさんのお子様の学びにつながる体験の手助けする事ができてとても良い経験になりました。
- ・普段は聞けない企業の悩みや部材の廃棄部分などいろんな一面が見れて面白かったです。
- ・今まで知らなかった企業を知るきっかけになるととても良い機会でした。初めての経験でしたが、とても楽しかったです。
- ・子供たちと一緒に工作しながら、話していつもは得られない新しい刺激を貰える機会が出来たと思いました。
- ・子どもたちの発想は想像を超えるおもしろさで、こちらもわくわくしながら子どもたちの作品作りのお手伝いをしました。

## 今後の展開

本取り組みは、社会交流センターが大切にしている「地域と共にある大学」「実社会と接続した学びの推進」のもと進めた実践です。大学の中だけで完結するのではなく、企業や地域の方々と同じ場に立ち、ともに考え・つくる経験を通して、社会と関わりながら形にする力を育む学びを体現しました。今後も社会交流センターでは社会と往復する学びの場を育て、本学ならではの実践的な学びを社会へとひらいていきます。